



Data 2022-23

監督: ロジャー・ミッシェル
 出演: ジム・ブロードベント / ヘレン・ミレン / フィオン・ホワイトヘッド / アンナ・マックスウェル・マーティン / マシュー・グード / ジャック・パインデイル / エイミー・ケリー / シャーロット・スペンサー

👁️👁️ みどころ

コロナ禍を含め、世知辛い今の日本では、“セコい”泥棒が目立ち、石川五右衛門のような“義賊”は登場しない。しかし、1961年にロンドン・ナショナル・ギャラリーで起きたウェリントン公爵の肖像画盗難事件は？

「絵画を返して欲しければ、年金受給者のBBCテレビの受信料を無料にせよ！」そんな要求をした犯人の狙いは？その犯人像は？

窃盗は窃盗！罪は罪！たしかにそうだが、法廷シーンに見る犯人の弁解、いや弁論の巧みさと説得力に感服。日産のケリー被告の裁判で大部分が無罪になったのは検察官の手落ちだが、本作で大半が無罪になったのは、なぜ？

60年前の事件の“驚きの真相”を今改めて考えたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ゴヤの名画に多額の税金をつぎ込むことの是非は？■□■

大阪市では2022年2月に大阪中之島美術館がオープンしたが、ロンドン・ナショナル・ギャラリーは長年イギリスが誇る美術館。他方、ウェリントン公爵は「ワーテルローの戦い」でナポレオンを破ったイギリスの英雄として有名だが、ゴヤが描いた「ウェリントン公爵」と名付けられた油絵の価値は、How much？

去る3月5日にNHKのTVで観た「清朝秘宝 100年の流転」は興味深かったが、1961年にロンドン・ナショナル・ギャラリーが「ウェリントン公爵」を落札した価格は14万ポンド。私的な好みの問題であれば、いくらで落札しようと自由だが、問題は、そこに多額の税金が投入されていることだ。ゴヤの名画に多額の税金をつぎ込むことの是非は？

新聞、テレビは連日大々的に『ゴヤの名画』落札のニュースを報道し、セレブへのお披露目の後、美術館の壁に飾られた。ところが、なんとその19日後に「ウェリントン公爵」

があっさり盗まれてしまったから、さあ大変だ。警察は国際的窃盗団の計画的犯行と発表し、世間は上を下への大騒ぎだ。

1961年7月21日に発生した「ウェリントン公爵の肖像画窃盗事件」にビックリなら、その後犯人から届いた脅迫状には「絵を返してほしかったら、年金受給者にはBBCテレビの受信料を無料にしろ」と書かれていたから、さらにビックリ！その狙いは一体ナニ？この脅迫状の文面から見える犯人像は？

■□■本作前半に見る“町の英雄”の生きざまは？■□■

本作の主人公である1904年生まれのカンプトン（ジム・ブロードベント）は、カリスマ性のある夢想家だったらしい。もっとも、そんな人間として生き抜くことが難しいのは、今も昔も同じ。善悪に対する強い正義感を持った彼は、権力者、特に雇用主と対立したため、長続きする仕事を見つけることは難しかったらしい。そのため、妻のドロシー（ヘレン・ミレン）が一家の稼ぎ手にならざるを得ず、掃除婦として働き、わずかにばかりの収入を得ていたようだ。そんな中、長女のマリアンが悲劇的な自転車事故で亡くなると一家は打ちのめされ、ますますカンプトンは想像の世界に引きこもり、寝室で戯曲を執筆する時間が増えたようだ。

本作前半は、そんな“町の英雄”カンプトンの生きざまが、ロジャー・ミッシェル監督の演出下、ユーモラスに展開していくので、それを楽しまたい。コロナ禍の日本社会はすべてがギスギスし、私設警察のような役割を果たす中年オヤジが出没しているが、彼らは真の“町の英雄”ではない。

1960年当時のロンドンの“町の英雄”カンプトンは、貧困によって社会から切り離された高齢者の孤独を救う有力な武器がテレビだと考えていた。そのため、彼は公共放送であるBBCを無料で受信できるように活動を続けていた。ちなみに、日本ではNHKの受信料の支払いを拒否しても刑務所に入れられることはないはずだが、BBCの受信料の支払いを拒否した彼は、2度も刑務所に入れられているようだ。

■□■義を見てせざるは勇無きなり！これぞ義賊！■□■

日本の教育レベルの低下が叫ばれて久しいが、とりわけそこで失われたのは語彙力や文章力だ。しかして今、「義を見てせざるは勇無きなり」という言葉を知ってる若者は10人のうち何人？泥棒が悪いことであり、犯罪になるのは、モーゼの“十戒”の時代から今日まで同じだが、日本では石川五右衛門を“泥棒”と呼ぶず、**“義賊”**と呼ぶのは一体なぜ？それはまさに、「義を見てせざるは勇無きなり」の考え方（価値観）が生きているからだ。

2021年9月22日に65歳の若さで亡くなり、本作が遺作となったイギリスの名監督、ロジャー・ミッシェルが、冴えない中年親父（老人？）のカンプトンを主人公に据えて、1961年に発生したゴヤの名画盗難事件を映画化したのは、何よりも彼がカンプトンを石川五右衛門と同じ**“義賊”**と考えたためだ。

ちなみに、時の太閤、豊臣秀吉の暗殺を狙って失敗し、捕まえられた石川五右衛門は、

釜ゆでの刑に処せられて死亡したが、それまでに彼が仕出かした数々の窃盗罪については、罪に処せられていないはずだ。そんなことを考えると、ゴヤの名画「ウェリントン公爵」を盗んだ罪で裁判に付せられたケンプトンの罪と刑は如何に？

■□■窃盗の動機は？なぜ脅迫状を？事件の真相は？■□■

本作のパンフレットには、ケンプトンが書いた自筆の脅迫状の写りが載っているうえ、「事件の真相」が詳しく解説されている。したがって、弁護士の立場だけで言えば、これを読めば本作を観る（楽しむ）必要はないのだが、映画評論家の立場では、そんなパンフレットを読むよりも、映画そのものをしっかり楽しみたい。そうすると、あなたも私も同じようにきつとロジャー・ミッシェル監督が目指したように、「ウェリントン公爵」盗難事件の犯人はケンプトンだと見なしてしまうだろうが、さて事件の真相は？そして、事件のつまり真犯人は？

そこで最大の焦点になるのは、なぜ、ケンプトンがああ脅迫状を出したのかということだが、それを考えるについては、脅迫状を出した時期と、ケンプトンがBBC受信料不払いで逮捕された時期を考える必要がある。ケンプトンがゴヤの名画の窃盗犯として逮捕されたのは、絵を無事に返す見返りとして、14万ポンドの慈善団体への寄付を求める返却条件の手紙（脅迫状）を出したためだから、ケンプトンが逮捕、起訴されるについては、窃盗罪のほか、脅迫罪等々、複数の罪名が付けられてしまったのは仕方ない。

それはたしかにそうだが、そもそも根本的な疑問は、ケンプトンのような老人が、厳重な警戒がされているはずのロンドン・ナショナル・ギャラリーから、なぜいとも簡単に「ウェリントン公爵」を窃取できたのか？、ということだ。それはとてつもなく難しい作業だからこそ、ロンドン警視庁は「国際的なギャング集団による、周到な計画的犯行だ」と断定したわけだが、さて事件の真相は？それは本作の検察官や裁判官の判断に委ねるしかないが、本作後半に展開される法廷シークエンスの中で観客には明らかにされていくので、私たちはそれをしっかり楽しみたい。

■□■妻の反応は？応援は？弁護士の弁護方針は？■□■

本作でケンプトンの妻ドロシーを演じたのは、なんとヘレン・ミレン。彼女の代表作は、エリザベス2世役を演じて、アカデミー賞最優秀主演女優賞を受賞した『クイーン』（06年）（『シネマ13』185頁）だが、そんな大女優が本作では出来の悪い亭主に振り回される妻役を静かに熱演しているので、それに注目！

娘を交通事故で失ったため悲嘆にくれたのは夫も妻も同じだが、そうだからと言って、町の英雄として社会に貢献するだけで稼ぎもしない夫は基本的にダメ亭主。戯曲を書いて放送局に送りつけるのもいいが、それは採用されてこそその価値だから、採用されたことが一度もないことは、つまり・・・？そんな出来の悪い夫をドロシーの稼ぎだけで支えているのだから、夫から感謝されて当然だが、ある日、ドロシーが家の中で発見したものは？

他方、本作後半は法廷シーンになるので、ケンプトンの弁護人として登場する弁護士ジ

エレミー・ハッチンソン（マシュー・グード）がいかなる役割を果たすのかが大きな焦点になる。依頼人は貧乏な中年親父だが、事件は社会やマスコミを賑わしたゴヤの名画盗難事件だから、弁護士としてやりがいのある事件だ。果たして、その被告人は窃盗をはじめとするさまざまな罪を認めるの？それとも・・・？それについて、弁護士はいかなる指導的役割を？

■□■主人公の弁論術に感服！しかして判決は？■□■

国会議員にとって代表質問が国会の華なら、弁護士にとって刑事事件の最終弁論は法廷の華。もっとも、最終弁論は弁護士が被告人に代わってやるものだから、被告人が自分自身でやることも可能だ。また、被告人には法廷で陳述する権利が認められているから、最終弁論だけでなく、被告人質問の中でも自分の考えを自由に語ることができる。そのため、『日本共産党闘争小史』では、被告人・市川正一が法廷で語った被告人質問の内容が詳細に記録されており、それが一つのまとまった物語になっていた。

そう考えると、放送局が採用してくれなかったとはいえ、毎日、戯曲を書いていたケンプトンなら、書くこともしゃべることも得意なはず。そうすると、自分が裁かれている刑事法廷の被告人質問や最終弁論で、弁護士を差し置いて(?)独演会をやることも可能・・・？そんなことをすれば、裁判官や陪審員の反発を買うこともありうるが、本作に見るケンプトンの独演会(?)での最終弁論は？

『レインメーカー』(97年)、『シネマ1』106頁)や『アミスタッド』(97年)、『シネマ1』43頁)の最終弁論に見た弁護士の弁論術の素晴らしさに私は感嘆したが、本作ではケンプトンの弁論術の素晴らしさに感服！それは12人の陪審員も同じだったらしく、裁判長からの「guilty or not guilty?」の問いに対する、陪審委員長長への回答は・・・？

2022(令和4)年3月15日記